

## 鳴滝散策(2)

## 本会幹事

## 栗原眞高

### 1、鳴滝町の誕生

鳴滝町は、大正12年(1923)以前は、「なかご」と呼ばれた中川郷の一部であったが、同年、同郷は廃止され、鳴滝町と中川町が誕生した。

鳴滝は、鳴滝川沿いにあり、平偃(ひらいで)と呼ばれた。鳴滝川の源は、烽火山と八気山(焼山)に発し、一瀬川に合流する手前に小規模ながら滝が形成されていた。そこで延宝年間(1673~80)長崎奉行牛込忠左衛門がその景観を賞して鳴滝と命名、併せて巨石に林道栄の書「鳴滝」を刻ませたといわれる。



伝林道栄書「鳴滝」

鳴滝町は、昭和56年(1981)11月の町界町名変更で、鳴滝1・2・3丁目と分割される。徳光山高林寺、西道仙の琴石は1丁目、シーボルト宅跡及び記念館が2丁目にあり、七面山妙光寺及び烽火山は3丁目にある。

### 2、赤地藏(1丁目、高林寺境内)



赤地藏

長崎で一番古い地藏といわれている。承応3年(1654)馬町・立花市助と刻まれている。地藏の頬に膏薬を貼ったり、自分の頬となで合わせると歯痛が治ると伝えられ、治ると感謝の意味で赤く塗っていたので赤地藏と呼ばれた。

### 3、西道仙と琴石(1丁目)

明治元年(1868)道仙33歳の時、澤宣嘉が長崎裁判所総督として赴任した。道仙は、維新前に同総督に建議した縁もあり、特に知遇を受けた。澤は、道仙を長崎府奥詰文書役に取り立てようとしたが、道仙は民間にあることを欲し、役を辞退したといわれる。

道仙はその後も人間は貴賤を問わず名字を公称させるべきとか、医業に関する検査法を創設すべきこと

などを建白した。そして自著を献じた。澤が賞金を与えようとしたが受けず、その代わりに武功山(鳴滝1丁目)の官有地にある琴に似た大石を所望した。澤も其の意を汲み、賞状と共に其の大石を与えた。



琴石・琴石西先生記念碑・旧門柱

賞状の大意は次のとおりである。「王政維新前後、追々献言、著書を差し出すなど報国の為、尽力の段、神妙の至り、賞金辞退致候に付、望みにまかせ官有地にある石をつかわし、賞金に代ふるものなり。」

年を経て、今日でも琴石は当時のままのようである。道仙に「賜琴石斎」の号のあるのはこのためである。

### 4、シーボルトノキと四角竹(2丁目、シーボルト宅跡)

#### (1) シーボルトノキ

シーボルトノキは、今では自生のものではなく、鳴滝2丁目のシーボルト宅跡に植えたものが残っている。この樹の由来については長い間分からなかったが、これはシーボルトのかつての使用人で、シーボルトの帰国後シーボルト宅を管理していた下見国吉という人が、付近の山の自生樹を移植したものであることがわかったといわれている。その後、この親木からさし木や取り木で増やしたものが、出島と長崎大学教育学部内に1本ずつある。

#### (2) 四角竹

宅跡の上段倉庫跡北側に、直径約10mm位の四角な竹が野生し、現在周りを鉄柱で囲んである。長崎では珍しい竹である。

### 5、おわりに

現在、長崎市道中川鳴滝3号線の道路改良工事が進められている。中川2丁目から、鳴滝1・2・3丁目を経て片瀬中学校前まで通じる道路である。

本稿は、令和6年10月例会の発表要旨である。